

# 藤波の 花は盛りに なりにけり

## 平城の京を 思ほすや君

大伴四綱 卷三・三三〇

四綱と書かれた木簡が出土しています。四綱の帰京時期をもう少しさかのぼらせることもできそうです。

奈良を離れると、奈良の良さがよく分かるようになり、もう一度戻っていると、さらに深い感慨が生まれま

す。奈良を離れて奈良を想う歌をよんだ四綱の目に、帰京後の平城

京はどのように映っていたのでしょうか。

(県立万葉文化館研究員・吉原啓)

私は、大学に入学してから10年間、奈良県で古代史を学んでいましたが、栃木県での5年間の仕事を経て、この春、奈良県に戻ってきました。住み慣れた奈良を遠く離れて暮らしている、折にふれて美しい奈良の情景がよみがえってくるということがあります。「藤波」という言葉は、長く連

なつた藤の花が風に揺れるさまをよんだものでしょうか。この歌からは、大学時代に友人と見た春日大社の藤の花が、5月の薫風とともに思い出されます。歌の作者は、大伴四綱。この歌は、四綱が平城京から大宰府へ出向していた頃に、大宰帥(大宰府の長官。728頃〜30赴任)であ

# やまと 万葉がたり

った大伴旅人に向けてよまれたものです。四綱にとっても旅人にとっても、平城京内の藤が印象深かったということだと思われま

す。屋王邸宅跡から出土した木簡には大伴四綱「大伴四〇〇〇(綱一人カ)」などと書かれており、木簡の時期は710〜17(和銅3〜靈龜3)年と考えられます。四綱が都の風に吹かれながら藤をめでていたのは、この頃の遺構から、二〇(大カ)伴

【訳】藤の花が波うって盛りになつたなあ。奈良の都を恋しくお思いでしょうか。あなた。

あをによし

寧樂の家には 万代に

われも通はむ 忘ると思ふな

作者未詳 卷一・八〇

私は大学生の頃、平城宮跡に復元された朱雀門の近くに暮らしていました。連子窓の青丹塗りの柱、白い壁をもつ朱雀門の美しい姿もさることながら、風の強い夜に聞こえてきた、朱雀門に付けられた風鐸(ふうたたく)の鈴の乾いた音もまた、忘れることができません。

この歌は巻一・七九

番歌(藤原京から平城京へ遷都した際の歌)への反歌としてよまれています。七九番歌では、大君のご命令を承って：遠い道のりを通って作った宮に、大君よ、千年の後までお住まいください。私も通ってまいります。と歌っており、それに対して八〇番歌で「万代にわれも通はむ」と

やまと 万葉がたり

歌い、天皇への変わらぬ忠誠を、都の永遠性を歌うことで示しているのでしょう。

このように書く、平城京が廃都となった歴史を知る現代の私たちには、寂しい歌のようにも感じられます。しかし、平城京は決して忘れられた都ではありません。この都は、千年の後までも語り継が

れ、再び姿を現した都だからです。

平城宮の所在は、1852(嘉永5)年北浦定政の「平城宮大内裏跡坪割之図」によって、精度の高い比定がなされました。ところが、それ以前の17世紀に書かれた地誌「和州明らかに」で、

【訳】青丹も美しい奈良の家には、いつまでも通ってまいります。忘れるなどとお考えくださいな。

旧跡幽考(林宗甫著)にも、平城宮跡の大まかな所在地は示されています。平城京が廃都となった後も、人々が地名などによって都の記憶を語り継いできたこともあり、千年近い時を経ても所在地を明らかに語り継いできたものです。(奈良文化財研究所による調査や普及活動によって、注目を集め続けています。人々の記憶によって千年の時を超えてきた奈良の都。次は私たちが、万代までも忘れずに語り継いでいきたいものです。)

その後、明治になって、榎田嘉十郎らによる保存・顕彰運動により、平城宮跡は史跡として保護されました。現在では、奈良文化財研究所による調査や普及活動によって、注目を集め続けています。